# 実践英語

基礎教育センター・教授
福島　富士男

## 1. 日本人教員実践英語Ⅱabの概要

2008年度後期実践英語の授業評価の報告を行うに当たって、前期に行ったIabの授業評価とは異なって、このアンケート調査対象が実践英語IIabであることを断っておきたい。

実践英語プログラムは以下のように構成されており、今回行った調査はIIabのクラスに当たる。

1年次

| Iab（日本人授業、統一） | Icd（NSE 授業、統一） |
|---|---|
| Reading, Listening<br>統一テキスト、統一試験 | Oral Communication<br>(Role-Play, Presentation)<br>統一テキスト、統一試験 |

2年次

| IIab（日本人授業、選択） | IIcd（NSE 授業、統一） |
|---|---|
| 三つのメニュー（Media, Reading, Comprehensive）から選択 | Oral Communication<br>(Role-Play, Debate)<br>統一テキスト、統一試験 |

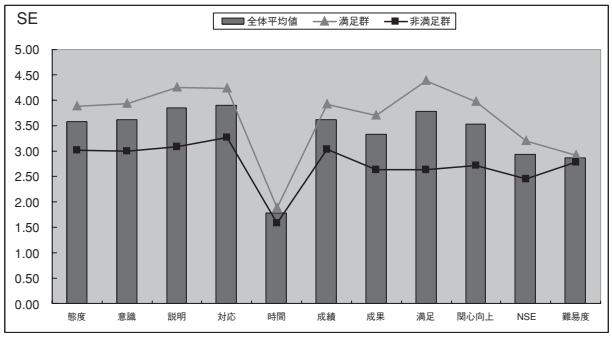
実践英語IIabはMedia，Reading，Comprehensiveという三つのメニューを設け、さまざまなジャンルの英語を学べる機会を学生に提供している。本学英語教育（2年次に医療英語を履修する健康福祉学部生を除けば）の3／4の授業は統一テキスト、統一試験の枠組で行われているので、実践英語IIabの選択性は、学生にも、また教員にも人気がある。学生にとっても、教師にとっても自由度の大きい授業であるが、1クラス25人以下の編成となっているため、場合によっては希望のクラスを履修できないこともある。

## 2. 2008年度実践英語授業Ⅱabの授業評価

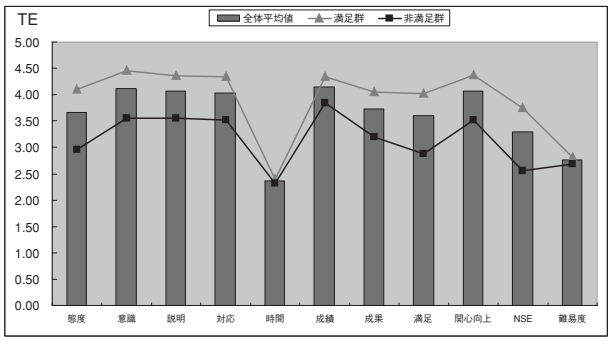
前回の授業評価アンケートと比べてみると、学生の満足度（3.86；昨年3.78）はかなり高い。しかも、教員の満足度（3.60；昨年3.60）よりも学生の満足度のほうが高い。通常は、教員の満足度のほうが学生評価より数値的に高いのが普通だが、昨年同様、実勢英語Ⅱabについては、学生の満足度が非常に高いと言える。（加藤光也「実践英語教育の現状について――第3回FDセミナー報告から」FDレポート第4号参照）。

つまり、グラフで見ても、自由記述の回答でも、学生が実践英語IIabによい評価を与えていることが分かる。

（学生による授業評価）




（教員による授業評価）




自由記述による回答でも、学生が積極的にこの授業に取り組んでいることが分かる。「授業を改善してほしい」（79件、昨年94件）なのに対して、「この授業でよかった点」（179、昨年113）となっている。

具体的な回答例は割愛させていただくが、学生の評価は非常に高い。さまざまな教材・機器を使い、またさまざまな工夫を凝らして、教師が学生の勉学意欲を引き出している印象を持つ。と同時に、専任教員と非常勤教員の担当コマ数（専任14コマ：非常勤54コマ、昨年は13コマ：55コマ）を考えると、いかに非常勤教員の努力に負っているかを痛感する。

## 3. NSE授業のアンケート調査について

NSE教員クラスのアンケート調査は業務委託先のベルリッツが独自に行っている。以下その報告である。

2008年前期と同じ質問形式のアンケート調査が行われた。日本語に訳すと、以下のような質問項目になる。

1. 教科書は適切でしたか。

2. 授業中の活動のなかで、どれが一番楽しかったですか。
   a. ペア・ワーク
   b. グループ・ワーク、
   c. 単独ワーク
3. 教師の指示と声は容易に理解できましたか。
4. この授業はやりがいがありましたか。

簡単な質問項目だが、NSE授業が学生にどう受け止められているかを見るには、これで十分かもしれない。なお、（　）内数値は、2008年前期アンケートによる。

紙数の関係で、1と4についてのみ前期と比較して示す。

1年生：

1. 教科書は適切でしたか。
   難しすぎた3%、ちょうどよい82%、易しすぎる14%（4%、75%、21%）
4. この授業はやりがいがありましたか。
   大変やりがいがある7%、やりがいがある77%、あまりやりがいがない15%（7%、71%、22%）

2年生：

1. 教科書のレベルは適切でしたか。
   難しすぎた3%、ちょうどよい78%、易しすぎる20%（3%、78%、20%）
4. この授業はやりがいがありましたか。
   大変やりがいがある5%、やりがいがある74%、あまりやりがいがない21%（5%、71%、24%）

昨年の授業評価同様、学生は積極的にNSE授業に参加しているのが分かる。初年度（4年前）にみられた難しいテキストでなければ英語学習の「ありがたみ」を感じないという傾向は減少してきたように思われる。ただ、それでも、教科書は授業実施における重要な教材であるので、より本学学生の学力・知的関心に適した教科書に改訂していくことが必要だろう。

## 4. 4年目を終えた実践英語――今後の課題

### 1）都市政策コース2年次履修問題

都市政策コースでは、平成22年度から2年次学生を受け入れることになっている。現在の実践英語履修システムでは、都市政策コースの2年次生の実践英語IIabcd履修については、何らかの困難が生じることが予想される。

これは、英語教育にとって、入学時にクラス編成テストを行い、レベル別に編成したクラスを「壊す」ことにもつながりかねない事態とも言える。冒頭の表にも示したように、実践英語Iabcd、IIabcdは緊密に連携し合っており、入学時のクラス編成と不可分のものである。そのなかで、全学生に対してクラス選択の自由を保障する実践英語IIabを提供している。

いずれにしろ、都市政策コースにも、各学部・学系にも、実践英語の履修に関しては、理解を深めていただきたいと思う。

### 2）再履修者問題

4年目を終わった実践英語では、ほぼ次のような再履修者発生率を確認している。

通常クラスでは、履修登録者の7～10%が不合格となる（つまり、「0」または「1」評価）。

再履修クラスでは、履修登録者の15%～25%が不合格となる。

そして現在、4年間の累積不合格者数が、再履修クラスの編成に大きな影響を与えはじめている。その数の増加もさることながら、現在再履修の授業は、5、6時限に配置されているので、クラス増となれば、近い将来別の配置を考える必要が出てくるかもしれない。そうなると、英語のセクションだけでは処理できない、時間割配置全体の問題となる。

### 3）英語教育分科会

こうした英語教育全体を動かしているのが、英語教育分科会（8名、2年任期）である。

昨年5月のFDセミナーでも発表したが（福島富士男「実践英語――「統一」がもたらすもの」FDレポート第7号）、英語教育分科会の負担と責任は、通常の大学教員が担い得る範囲を超えている。大学を代表して行わなければならない社会的な行為も多く、またクラス編成テストや統一試験等では学生の安全面も危惧される。早急に、大学としての責任ある対応を考えていただきたいものである。